

# スピノザ倫理学をスピノザ語録にして考える

## 1, はじめに

スピノザは1632年アムステルダムに生まれ、1677年ハーグにて死去した。過日、YouTubeを見ていると、〇〇塾の講義として〇〇講師が、スピノザの「倫理学(エチカ)」を読んだことはないのだがと断った上で、スピノザの倫理学はどういうものかという講義をしていた。

あれまあと思った次第である。それならば、「倫理学(エチカ)」を一応読了した私の方が、まともな話ができると思った次第である。

河出書房新社「世界の大思想11、スピノザ」の「倫理学」(高桑純夫訳)を参考に、スピノザ語録をつくり、スピノザの倫理学を考えることにした。

「倫理学」は5部からなる。

第1部 神について

第2部 精神の本性および起源について

第3部 感情の起源および本性について

第4部 感情への屈従あるいは感情の力について

第5部 知性の能力または人間の自由について

## 2, 第1部から

第1部の付録の部分が、まとめになっていて、非常に面白い。よって、付録の部分から語録を作ることにした。

\*「すべての人間は、事物の原因を知らないでこの世に生まれたものであることや、すべての人間は自己の利益を追求する衝動を持ち、それを自分でも意識しているということなどを根底において話を進めることで満足しよう。」

なんでそうなるの、ということを生まれたときから分かっている人間はいないのだ。自己の利益追求を基本にしよう。というわけだ。

\*「第1、人間は自分を自由であると考えろ。」「第2、人間は、すべてを、成る目的のために行う。すなわち、彼らの欲する利益のために行うのである。」

人間は、利益追求のためなら何でも自由にするというわけだ。そして、人間は利益追求のために神を利用するというわけだ。

\*「石が一つ、屋根からだれかの頭上に落ちてきて、彼を殺したとする。・・・もし石が、神意によってこの目的のために落ちたのでなかったら、どうしてかくも夥しい事情が偶然にも一点に集まるようなことになったのであるかと。・・・なぜちょうどその時に風が吹いたのか、なぜその時ちょうどそこにとおりかかったのかと、追及の手をゆるめない。・・・奇跡の真の原因を追及し、自然の事物を、愚者として驚嘆するよりは賢者として理解しようと努めるものは、

一般からは異端者、不敬漢と思われ、民衆が自然と神々の通弁として尊敬する人々からさえも、同じように罵倒されることになる。」

なにも、神だけのことではない。政治、社会の在り方と言い換えても良いのだ。

\*「神経が肉眼で知覚される対象から受ける運動、その運動がもし健康にいいとすれば、彼らはその働きかけてくる対象を、美しいという、これに反して、逆の運動を呼び起こす対象は、これを醜い異というがごときである。・・同じことも、ある人には良く、他の人には悪い。・・平素、自然を説明するために用いているすべての概念は、単に表象方法にすぎず、したがってそれらの表示するのは、けっして事物の本性ではなく、せいぜい表現能力の諸状態にすぎないことを知る。」

人間とは、どう感じるかがすべてなのだと、スピノザは言いたいようだ。

\*「なぜ神はすべての人間を創造するにあたって、理性の導きにのみ従うようにしなかったのかと問うとすれば、私の答えは、神は万物を創造するための素材を十分に、それこそ、完全性の最高程度のものから、最低程度のものにいたるまでをもっていたから、という以外にない。」

ありていに言えば、それが神の御意志だと言うことか。

### 3, 第2部から

特になし。

### 4, 第3部から

定理2備考から

\*「気狂い、おしゃべり女、少年、その他多くの同類者たちもみんな自分たちの精神の自由な決意によってしゃべっているんだと信じている。だが、実際はしゃべりたいという彼ら自身の衝動に、抵抗しきれないというだけの話なのである。・・各人は、一切を自己の感情を基にして行為するものだからだ。」

感情が基だ、行為は感情から生じる。考えて行動するのではない。というわけか。

定理19

\*「自己の愛するものが破壊されるところを表象するするひとは、悲しみに沈むであろう。それに対し、自己の愛するものが保持されているところを表彰するひとは喜びに浮かぶであろう。」

定理20

\*「自己の憎むものが破壊されるところを表象するひとは、喜ぶであろう。」

喜びと悲しみの感情、この二つの感情に着目せよというわけだ。

系3

\*「私たちは同情を感じる事物をできるだけその悲惨から解放しよ

うと努力する。」

系 3 備考から

\* 「親切をしようという意志または衝動、これは、私たちが親切を示そうとする事物に同情することから起こるもので、慈悲心と呼ばれる。ゆえに、慈悲とは、同情から生じる一種の欲望に他ならない。」

感情から欲望が生じるというわけか。

定理 2 8

\* 「喜びのために役立つと考えられるようなもの一切を、私たちは現実しようとする。反対に、悲しみに役立つと考えられるようなもの一切を、われわれは遠ざけようとするか、或いは破壊しようとするか。」

感情が行動をもたらすというわけだ。

定理 2 9 備考から

\* 「ひとびとの気に入ろうというただそれだけの原因で、あることをなそうとしたり、なすまいとしたりするこの種の努力のことを功名欲という。」

気に入られたいという欲から努力がなされるわけだ。

定理 3 1 系から

\* 「各人は、自分の愛するものを、皆にもまた愛させようとしてだけ骨折り、また、自分の憎むものを憎ませようとするものだ」

備考から

\* 「生来だれしも他人がみんな、自分の意向通りに生活してくれるようにと努力するものであることが分かる。そして、世の中は、みんながこの流儀で行こうとするから、みんながこの流儀で互いに邪魔し合い、みんながみんなから愛されたり賞められたりしようとするからみんなが互いに憎み合うことになるのである。」

自分の意向通りにさせようということから、抗争が起きるというわけだ。

定理 3 7

\* 「悲しみや喜び、憎しみや愛情から生ずる欲望は、感情が大きくなるにつれて大きくなる。」

感情が欲望の源泉だから当然だ。

定理 3 9

\* 「だれかを憎む人は、自分自身にもっと大きな禍の起こる心配さえなければ、相手に禍を加えようとするであろう。また反対に、だれかを愛している人は、同じ条件のもとでは、相手に親切にしようとするであろう。」

備考から

\* 「善とは、あらゆる種類の喜びのこと。悪とは、あらゆる種類の悲しみのこと。・ ・ 私たちの欲するものを善と呼ぶのだ。私たちが悪というのは、私たちが嫌いなものことである。・ ・ 各人は、自分の感情を基にして、何が善で何が悪であるか評価するのだ。・ ・ こうして貪欲者は、金の多いのを最善と考え、金の欠乏を最悪と評価する訳なのである。」

実に分かりやすい。感情がすべてというわけだ。

## 系 2

\* 「自分が以前には何の感情を抱かなかった他人が、憎しみから彼に何か禍を与えたとすれば、彼はすぐさまその人に同じ禍を返そうと努力するであろう。」

憎しみの感情から行動について述べている。

### 定理 4 3

\* 「憎しみは、それを仕返されることによって増すが、反対に、愛によって滅ぼされることがある。」

憎しみには愛をと言うわけだ。

諸感情の定義から

### 1 0

\* 「崇拜とは、私たちの驚嘆する人物への愛である。」

### 1 2

\* 「希望とは、ある見地から見れば結末のはっきりしない未来のまたは過去の一事物についての観念から生ずる不安定な喜びの一種である。」

### 2 5

\* 「自己満足とは、人が自己自身及び自己の作用能力を眺めたとき、そこから生ずる喜びの一種である。」

### 2 6

\* 「謙虚とは、人間が自己の無力または非力を見てそこから生じる悲しみの一種である。」

### 2 7 の「後悔」の説明から

\* 「爾来、習慣とか宗教とか言うものは、どの人間でも同じと言うことはないはずだ。むしろ反対に、一人が神聖と思うことも他人には瀆神と思われ、一人が尊敬に値すると思うことも他人には恥ずべきことに思われるであろう。したがって各人は受けた教育如何によって、同じ一つの行為を悔いることもあれば、誇ることもあるのである。」

教育の重要性の指摘である。感情に教育は大きな影響を与えるわけだ。

### 3 3

\* 「競争心とは、他人が、同じ欲望をもっていると想像することに我々のうちにある事物を得ようとする欲望の一種である。」

## 5, 第 4 部から

まえおきから

\* 「同一事物が同じ時に、善でもあり悪でもあり得るし、また善でも悪でもない、言わば中立的でもあり得るからだ。たとえば、ある音楽は憂愁な人には善い場合でも、傷心の人には悪く、つんぼには善くも悪くもないだろう。」

定義 1

\* 「善とは、それが我々にとって役立つことが確実に知られているもののことだと私は理解するであろう。」

定理 1 の備考から

\* 「真の距離が分かったとしても、私たちは依然として、太陽は私たちの近くにあるように表象するであろう。」

そのように、思い感じるからしかたがない、というわけだ。

定理 8

\* 「善および悪の認識とは、我々がそれを意識している場合の喜びまたは悲しみの感情以外の何ものでもない。」

定理 18 の証明から

\* 「欲望は人間の本質そのものである。換言すれば、人間が自らの存在にしがみつこうとする努力である。」

備考から

\* 「理性は各人が、自己を愛し、真に有益なものならそれを探し求めることを要求する。・・・次に、徳とは、自己の本性の法則に従って行為すること以外の何ものでもない。・・・徳の根底は、自己の有を維持せんとする努力そのものにより、したがって人間が自己の有を維持できるという点に人間の幸福は成立する。・・・理性の導きに従って自己の利益を追求する人間なら、他の人間のために望ましくないことは自分のためにも得ようとはしなくなり、従って彼らは、公平で誠実で高邁な人間となるだろう。」

衣食住が足りれば十分幸福ではないかというわけか。理性の導きに従うだろうか、人間は。

定理 21

\* 「現実生存することを要求しないような人間は何人も、幸福に存在し、善き行為をし、立派に生きようと要求することはできない。」

いわゆる死んで花実が咲くものかというわけだ。

定理 24

\* 「絶対に徳を基にして行為するという事は、我々人間においては、理性の導きに従いながら、自己の利益追求を根底として行為し、生活し、時の有を保持すること以外の何事でもない。」

理性の導きに従わなければ、動物と同じというわけだ。

定理 28

\* 「精神の最高善は神の認識であり、精神の最高徳は、神を認識することである。」

スピノザにとっては自明のことなのだ。

系 2 の備考から

\* 「人間が理性の導きに従って生活することはまれである。・・・人間が国家協同体を形成しているとき、そこから害悪よりは利益を引き出すことの方がはるかに多いというのが事実だ。・・・人間が相互扶助によって、自分の必要をどんなにやさしく調達することができ、また四方八方から襲いかかる危険を、ただ力を合わせることによってのみ、いかに回避しているかを、みずから経験しているにちがいない。」

協力共同の必要性を言っている。

定理 37 の証明から

\* 「人間は、彼らが理性の導きに従って生活しているとき、人間にとってもっとも有益である。・・徳に従うすべての人は、彼が自己のために求める善を、他の人々のためにも求めるであろう。」

自らの利益と世のため人のために利益が合致すれば問題はないのだが。

#### 定理 3 7 備考 2

\* 「人間が一致協同して生活し、相互に助けあえるためには、彼らは自己の自然権を断念し、互いに安心し合い、他人の害になるようなことは一切しないような人になることが必要だ。・・人間は誰しも、自分がよりひどい損害を受けることが恐いので、他に損害を与えようとしても、これを思いとどまるものだ。・・刑罰の威嚇によってこの法律や生活様式を確固不動のものとするようにしなければならぬ。・・人間が市民である場合には、この人またかの人に何が属するかについては、一般的合意に基づいて決定されるから、正義または不正義が起こりうるのである。かくて正義と不正義、犯罪と功績というのは精神の本性を説明する属性でないことは明らかだ。」

国家、社会共同体の役割はなになのだ、ということが問題になる。

#### 定理 4 0

\* 「人間の国家協同体に貢献するもの、また人間が一致協同して生活するよう働きかけるものは有益である。反対に、国家の中へ不和を持ち込むものは有害である。」

#### 定理 4 6

\* 「理性の導きによって生活する人は、自分に対する他人の憎しみ、怒り、軽蔑などなどを、できるだけ愛または高邁によって報いようと努める。」

理性はいかなるところより生じるか。理性のない人間はいるのか。

#### 定理 5 0 備考から

\* 「一切は神の本性の必然性によって生じ、自然の永遠なる法則と原理によって生起している。これを正しく認識した人は、人間の徳力の及ぶ限り、世に言うところの「善行を楽しむ」ことに努めるであろう。・・・理性にも同情にも動かされない人間は人非人と呼ばれるのが当然だ。つまり彼には、人間らしいところがもはやないと考えられるからである。」

神より人間は理性が授けられているというわけか。

#### 定理 5 2

\* 「理性から起こる自己満足は、あり得る自己満足の中で最高のものだ。」

#### 定理 5 4 備考

\* 「人間は理性の導きに従って生活することはまれにしかない。そこで、この謙虚と後悔という二つの感情、いやそればかりか希望や恐怖なども、害よりは益をもたらすことが多い。・・・無能な精神しか持たない人間が、みんなどれもこれも高慢ちきになり、恥を知らず、恐れるものを持たないというようなことになったら、それこそ社会的紐帯で結合させる方法がつかぬというものではなかろうか。」

無能な精神しか持たない人間が多いというわけだ。

#### 付録項目 4

\*「人生において、知性または理性をできるだけ完成させることが、なかんずく有益であり、この点にこそ人間の最高なる幸福または福祉は成立する。・・知性を完全化すると言うことは、神の属性および神の本性の必然性から生じる神の行為を理解することということに他ならぬ。」

神への絶対的信頼から導き出される知性、理性というわけだ。

#### 項目 1 7

\*「困窮者への配慮は、社会全体の責任であり、公共の福祉という点から考えるべきことなのだ。」

個人でできることは限界があるというわけだ。

### 5, 第 5 部から

#### 定理 1 5

\*「自己と自己の感情を、明晰かつ判明に認識する人は、神を愛する、そして、自己と自己の感情を認識すればするほど彼はいつそう神を愛するようになる。」

#### 定理 1 7

\*「神は、いかなる受動態とも関係がない。そして、神はどんな喜び悲しみの感情によっても動かされることはない。」

#### 定理 1 7 の系

\*「神は、何人も愛せず、また憎まないのである。」

神は人間ではない。よって感情はないというわけだ。感情からの行動はないというわけだ。旧約聖書に描かれている神は、感情にまかせて行動する神ではないのかな。

#### 定理 2 3

\*「人間精神は、身体が滅びると同時に、完全に破壊されるものではありえない、むしろ、精神の何ものかはそのまま存続する。それは永遠である。」

魂は不滅だという考え方だ。

#### 定理 2 4

\*「我々が、個々の事物をより多く認識すればするほど、それだけ多く我々は神を認識するわけになる。」

神の御心を認識するというわけだ。

### 6, 私的なまとめ

こうして私的な語録を作成してみると、スピノザは神への信頼を基にして思索していることがよく分かる。理性と知性への限りない信頼を基にして思索していることがよく分かる。